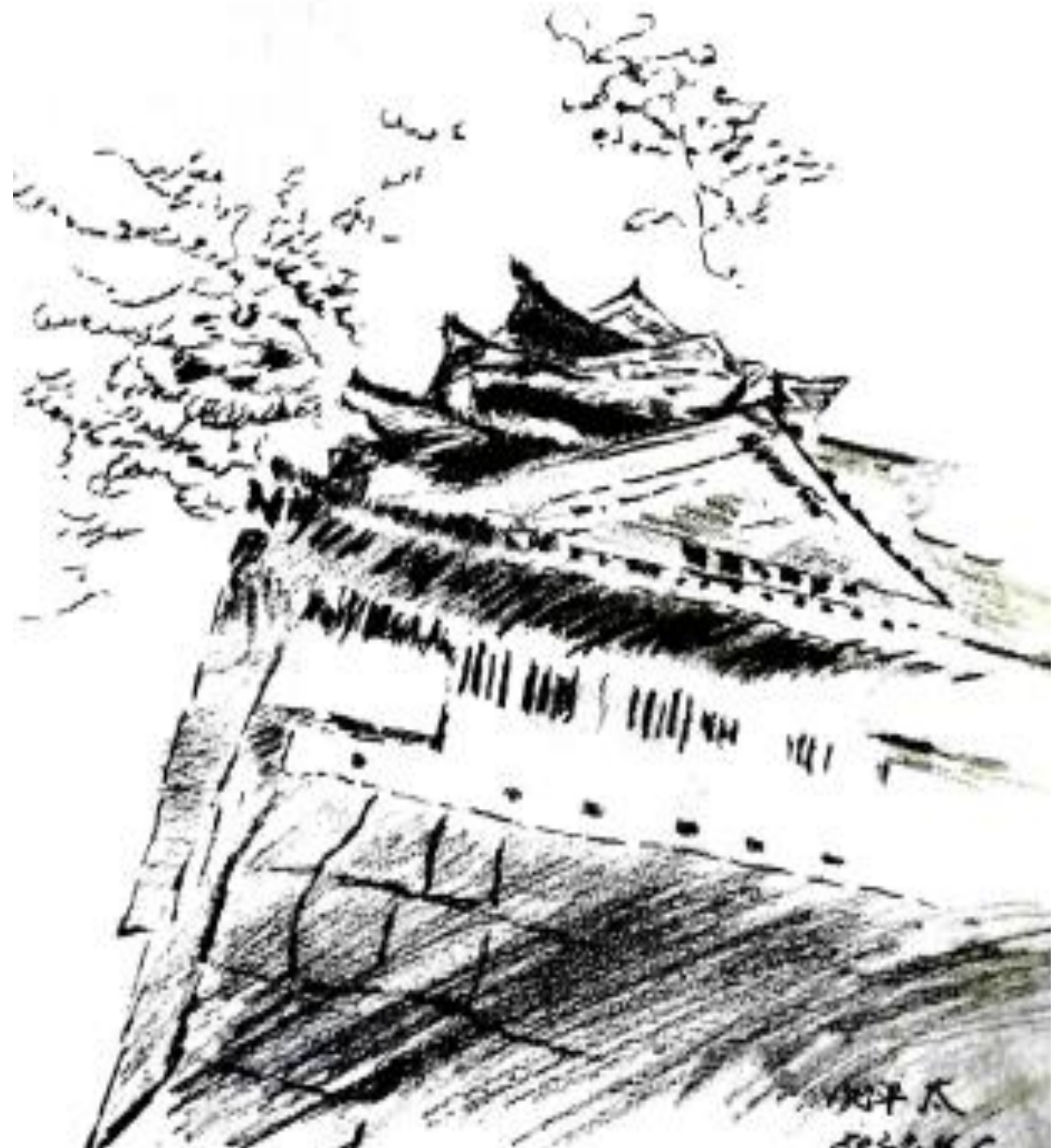


# 閣守天柳川

2024年9月号



第17回例会 2024年8月15日(木) 投句締切分

お題 「祭り」

小林満寿夫 選

- |                 |       |
|-----------------|-------|
| 初恋は祭囃子の笛太鼓      | 東尾由子  |
| 祭り太鼓遠くに聞こゆひとり酒  | 美代    |
| 斎王代紙上に載つて祭りの儀   | 三枝なな  |
| 裏金をお祭り騒ぎで逃げる筋   | 岩原一角  |
| 戦争は祭り侵略繰り返す     | 平川柳   |
| 祭り笛子らは夜店のラムネ瓶   | 山野寿之  |
| リストラムも忘れ御輿を担ぐ今日 | 久世高鷲  |
| 青年と古老の軋轢祭り裏     | 蔵内歳重  |
| 祭りなんてポツリと叔母の独り言 | 秋田あかり |
| 村祭り中学生で飲んだ酒     | 武智三成  |
| 故郷の太鼓懐かし秋祭り     | 青空    |
| 会えたならお祭りになるそんな恋 | 直子こ   |
- (五客)
- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 佳5 夏祭りうちわ背に差しりんご飴 | ルイ    |
| 佳4 郷愁を祭囃子が駆り立てる   | 岡野とら丸 |
| 佳3 失言が後の祭りとなる辞任   | 井澤壽峰  |
| 佳2 ココナから祭り気分が戻せない | 武智三成  |
| 佳1 そうか寅さんはもう居ないのか | 春田敏晴  |

(三才)

- |   |   |       |
|---|---|-------|
| 人 | お下がり <small>の</small> 浴衣嬉 <small>しい</small> 地蔵盆                   | 林ともこ  |
| 地 | 祭り終 <small>え</small> 無口 <small>な</small> 山車 <small>になつて</small> 秋 | 山野寿之  |
| 天 | 練り歩 <small>く</small> 子ども神輿 <small>に</small> 親続 <small>く</small>   | 三枝なな  |
| 軸 | 祇園祭済 <small>む</small> まで動 <small>け</small> ない京都                   | 小林満寿夫 |

(選評)

人の句

町内のお地藏さんを祭る子供たち、数珠回し等に興じた頃が懐かしい。時代諷詠とした浴衣に姉弟の関係を見る。

地の句

祭りを終えた寂しさと達成感が入り混じって山車もなんとなく俯く、詫び寂びがうかがえる。

天の句

子供たちの喜ぶ顔に祭りがある。親はその背中を後押しする。そのハーモニーが一層祭りを盛り上げる。少なくなった子供に試練がのしかかる。

# お題 「走る」

林ともし 選

残された命へ走る八月忌

老辞書に走る単語は見当たらず

過疎の村田畑を走る無料バス

まっすぐに少女の羽化を走る夏

夏帽子飛んでも走れないじい

宮入のクライマックス走る山車

半可通誤解したまま先走り

渋滞の隙間を縫って救急車

素足ならきつとあなたへ走り出す

譲れない思い月へと駆けて行く

待たれます紅葉の風にスローラン

お盆入りゆっくり走る走馬灯

秋田あかり

勘兵衛

東尾由子

秋田あかり

武智三成

松島きよみ

岡野とら丸

浜脇蓬生

直子

直子

佐野正邦

勘兵衛

佳5 日の丸を付けた競走馬に乾杯

佳4 夕立に雨が走って傘走る

佳3 走れない老いが邪魔する負けへんで

佳2 筆走り白紙に凜と墨の跡

信子

山野寿之

青空

井澤壽峰

佳1 納得がいくまで走り抜くゴール

山野寿之

(三才)

人 嘘ほんと混ぜて二人の持久走

島根写太

地 点滅になった走ろういややめた

佐野正邦

天 風の声聞かため走るひた走る

由夏

軸 どんなに走ってもライバルの背中

林ともし

(選評)

人の句

半世紀色々あって夫婦。

下五の「持久走」という表現が夫婦の在り方を上手く

表現されています。まさに持久走で仲良くいききたいですね。

地の句

せっかちな私も老いを感じてから、黄信号は待つて

ゆっくりゆっくり…:と言い聞かせています。

実感句です。

天の句

今までの自分を乗り越えて、新しい自分を見出す、

そんな姿が目には浮かびます。

年を重ねてもそうありたいものですね。

# お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

花火見る手にはスマホと扇風機

亡き人の面影宿る車椅子

イマジンを奏でるNOWARのタクト

自尊心削り不本意する妥協

お互いの心覗き見する握手

嘘ひとつじゃが芋の芽が伸びてくる

敗戦で旧弊切った道思う

あんなことこんなことあり猫じゃらし

そよ風は思いを運ぶオルゴール

墓にかけるビールの期限気にしてる

孫とカラオケ自分の世界それぞれに

青春を挽回しようこの先は

## (五客)

佳5 染み皺をアートと思うお気楽さ

佳4 ばら撒けど未婚非婚じゃ子も増えず

佳3 病名がわかつてホッとするカルテ

佳2 この老軀地球沸騰立ち向かう

佳1 被爆した母のいのちを吸う赤子

勘兵衛

ルイ

島根写太

久世高鷲

山野寿之

直子

武智三成

三枝なな

東尾由子

浜脇蓬生

青空

信子

松島きよみ

加山勝久

林ともこ

佐野正邦

平川柳

## (三才)

人 膝手術歩く楽しみ光射す

地 快樂の先で墮落が蹲る

天 働けているからそれなりの明かり

軸 朝夕に悔いを詫びてるお仏壇

堀内きみ子

井澤壽峰

小林満寿夫

真鍋心平太

## (選評)

人の句

歩けなくなつて初めて、自分で歩けることのありがたさが分かる。手術をされたのだろうか、これでまた歩けるといふ喜びと期待感に溢れた句。自分も杖について歩いているのでよく分かる。どうぞお大事に。

地の句

「足るを知る」という清々しい人間の姿を忘れて浮かれるのが快樂であるから、その先にあるのは墮落しかないのだが、それを求めて我々は毎日あくせくしている。

天の句

無給でも低賃金でも働いている方が何もしないより良い。身体を動かすというだけでも良いように思う。それはきつと誰かの役に立つ。下句の「それなりの明かり」が心地よく響く。

# お題 「平凡」

互選

1点

朝起きて今日も元気だ飯美味しい  
平凡に足早に流れる月日  
凡人の起死回生の時を待つ  
コーヒーは夫の役目朝ごはん  
身に付いた垢ぞだらだら生きる

平凡とかけ離れてる核疑惑

平凡を二人で生んでいく非凡

何回か会っているのに初対面

ブレイキン踊ってくれと言い放ち

平凡から飛び出す策はないものか

平凡をずっと続けるパワー持つ

希望というわが子生れて愛燦燦

凡人に見えてなかなかワザがある

団地恋しタワーマンション落ち着けず

共白髪愚直に愛し合ってきた

富も名なく日々の健康感謝のみ

平凡な夫と平和に五十年

目立つこと無く生きた人生それも良し

平凡の難しさ知るケンカ後

この猛暑裸でいるしか能がない

平凡の幸に満足できぬ欲

一週間たてば忘れる震度6

日々定時帰宅途中に見るスマホ

青空

信子

蔵内歳重

青空

小林満寿夫

堀内きみ子

山野寿之

浜脇蓬生

春田敏晴

信子

ルイ

平川柳

岡野とら丸

松島きよみ

秋田あかり

美代

由夏

美代

島根写太

小林満寿夫

山野寿之

春田敏晴

久世高鷲

3点

預金等無いが心にある余裕

平凡だつて幸せならばいいじゃない

平凡を続け非凡の風になる

集大成プラスマイナスゼロになる

非凡さも少しは欲しいうちの人

平凡な暮らしの中にある安堵

平々凡々蜘蛛の巣の美しさ

凡人の大臣に就く日本の禍

平凡な日々を過ごしてダイヤ婚

平凡な母は笑顔で車イス

平凡な女でいたいゲリラ雨

平凡でいい平凡の難しさ

平凡に飽きて波風立ててみる

平凡の陰に隠れて違う顔

平凡を望む自然の持つ脅威

平凡な日々を求めて苦労する

平凡な暮しに似合う発泡酒

程々にボーダーライン引いて今

戦争はむごい平凡捨てられぬ

平凡という幸せの花が咲く

おはようと同じ空気を吸うふたり

朝顔が咲いております二つ三つ

井澤壽峰

由夏

島根写太

三枝なな

加山勝久

井澤壽峰

直子

蔵内歳重

久世高鷲

東尾由子

直子

林ともこ

岡野とら丸

浜脇蓬生

武智三成

勘兵衛

林ともこ

三枝なな

武智三成

平川柳

秋田あかり

真鍋心平太

2点

3点

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。  
得点が空白のものは前行の句と同得点です。

# お題 「日暮れ」短句

互選

1点

日暮れに群れる恐怖のカラス  
日暮れまで帰れぬ子どもにGPS

三枝なな  
加山勝久

夕日沈んでただ母恋し

青空

値引きを探す老いの買い物  
夕焼け小焼け涙で滲む

真鍋心平太  
岡野とら丸

日暮れてもなお地獄の暑さ

浜脇蓬生

未練が無いと愛日暮れ道

東尾由子

老眼鏡と戦つてる鵜

小林満寿夫

日暮れと共に生まれ変わろう

直子

日暮れを待つて散歩五千歩

信子

キャンプファイヤー日焼けの笑顔

由夏

日暮れの街は私の居場所

堀内きみ子

日暮れになつて気付く傷痕

直子

暮れ泥む空映える夕焼け

井澤壽峰

のぞきたくなる深夜食堂

春田敏晴

のれん恋しい男の日暮れ

林ともこ

日暮れになると揺れるは禁酒

堀内きみ子

提灯が出て席は乾杯

武智三成

足取り緩く帰る人なみ

ルイ

夕間暮れには亡母の面影

久世高鷲

沼の日暮れに河童の夫婦

平川柳

老いた二人の液化の日暮れ

平川柳

母さんを待つ夕暮れの駅

秋田あかり

ひぐらし鳴いて里山涼し

浜脇蓬生

昼酒過ぎた紅蓮の夕陽

松島きよみ

4点

日暮れてもなお燃える夏空

井澤壽峰

5点

感情の波冷ます夕暮れ

岡野とら丸

暮れなずむ田に赤蜻蛉飛ぶ

美代

オレンチ色の恋日暮れ坂

東尾由子

人生の暮れ遇えた川柳

蔵内歳重

鍬を洗つて畳む夕暮れ

林ともこ

6点

ブランコを蹴り夕焼けを待つ

山野寿之

セミ転がつて夏の夕暮れ

秋田あかり

7点

灯を灯してももう居ない君

春田敏晴

8点

檸檬輪切りにセンチメンタル

真鍋心平太

14点

夕陽飲み込む群青の海

美代

今月の投句者(28名 敬称略)

井澤壽峰 加山勝久 久世高鷲

勘兵衛 島根写太

山野寿之 岩原一角 信子

春田敏晴 松島きよみ

武智三成 平川柳 ルイ

三枝なな

真鍋心平太 青空 林ともこ

秋田あかり 美代

浜脇蓬生 直子 由夏

岡野とら丸 蔵内俊重

小林満寿夫 堀内きみ子 佐野正邦

東尾由子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論 「現代川柳の詩学」を考える ⑧

―川柳の技法(3) 比喩・隠喩

―「古川柳」から現代川柳へ―

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳 (東京川柳会主宰)

次に間接な比喩法である「隠喩」についてご紹介したいと思います。「暗喩」とも言われています。これはAというある事物の状態を形容するのに別なBという事物を引き合いに出して比喩する方法です。この点では「直喩」とかわりませんが、「直喩」は「AはBのようだ。」という「のよう」<sup>たと</sup>とか「のごとく」などの語を用いての比喩法ですが、「隠喩」は「のよう」<sup>たと</sup>とか「のごとく」などの比較語を用いない「AはBだ」と表現する比喩法です。

例えば、「花のように揺れる心」は「直喩」ですが、「君は薔薇だ」は「隠喩」です。

「隠喩」は英語では「メタファー」(metaphor)といいますが、これは類似点をあげて読む者に連想させる比喩法です。

英語の語源は古代ギリシア語に由来し、「メタ」

meta)は「変化」を意味し、「ファー」(phor)は「持つ」という意味です。つまり「メタファー」とは「変化を持つ」という古代ギリシア語が語源で「直喩」のように明示的に比較の言葉を使わずに異なる二つの事物を比較して表現する比喩法なのです。

例えば、『俳風 柳多留』(初篇)には、次のような「隠喩」を用いた「古川柳」があります。

赤とんぼ空を流るゝ竜田川

この「古川柳」では「赤とんぼ」が縦たてに群れをなして飛んでいる様子が、まるで大和の紅葉の名所として知られる「竜田川」が紅葉を浮かべて空を流れていると「暗喩」で表現しています。「赤とんぼ」は体の色の赤いとんぼの総称ですが、狭義には秋、平地に群を成して出現する「アキアカネ(秋茜)」をさします。

『俳風 柳多留』(初篇)の「古川柳」には、「直喩」やこのような「隠喩」の比喩表現を用いた川柳が収録されていますが、次のような現代川柳にも「隠喩」が用いられています。

## さまざま見ると向ける顔の中の岩盤

十四世川柳 根岸川柳

この川柳は昭和三十一年、作者が六十八歳の作です。作者は初世川柳 柄井川柳の川柳号を戦後はじめて嗣号し、昭和二十三年に東京川柳会を主宰した十四世川柳宗家 根岸川柳ですが、十四世川柳は歴代川柳宗家の中で川柳作家として『根岸川柳作品集 考える葦』を刊行し、川柳作家とは川柳哲学を持ち、「定着を否定し、常に前進する」姿勢で川柳を作るのが、川柳作家の本道であると弟子たちに語っていました。この川柳作品から根岸川柳は眼に見える対象から眼に見えない自己の内面へ視点を移し、自己と外部世界との二つ異なる「イメージ」を重ねて現実の自己の存在を表現しようと試みています。「顔の中の岩盤」という表現はこれまでの川柳作品には見られない「隠喩」です。これは「直喩」では表現できないもので、作者はこの「隠喩」の表現を用いて確かに「顔の中に岩盤」の「イメージ」を实体として発見し、それを「隠喩」で表現しているのです。

フランスの哲学者ブレイズ・パスカルは「人間は考え

る葦」であるという「隠喩」で人間の存在を見事に詩的に表現しています。

十四世根岸川柳は「人間諷詠」の現代川柳を作る川柳作家は、こうしたパスカルの「人間哲学」を核にもたなければならぬと考え、「哲学的川柳」を探究しました。

以下、「隠喩」を用いた現代川柳を紹介します。

牛のマンドリンを聞く騎兵―秋の胃

十六世川柳 青田川柳

にんげんのことばで折れている芒 定金冬二

雪は愛 白いまつりが降りてくる 墨作二郎

河童起ちあがると青い雫する 川上三太郎

けものみち死ぬる螢を抱き抱き 細川不凍

暁を抱いて闇にゐる蕾 鶴彬

恋人の膝は檸檬のまるさかな 橘高薫風

人間を掴めば風が手に残り 田中五呂八

海昏れて港は母の顔で待つ 大石鶴子

半熟の夢がトーストから落ちる 久保田元紀

ひらがなのふたりになって夕暮れる 真島久美子

(続く)



# 第18回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「猫」 岡野とら丸 選  
「面」 由 夏 選  
「魔法」 互 選  
「雑詠」 真鍋心平太 選  
「背」(短句) 互 選  
(投句 各 2 句)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は  
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

[https://tensyukaku.com/id\\_make.php](https://tensyukaku.com/id_make.php)

投句開始 2024年9月9日(月) から  
投句締切 2024年9月15日(日) まで  
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。  
9月16日(月)～9月19日(木)  
披講発表 9月20日(金)から随時閲覧可能になります。

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録

7月末から3週間ほど風邪をひいて寝込んでしまいました。  
おかげさまで何とか回復してほっとしていますが、エッセイと  
巻末の絵はお休みさせて頂きます。御了承の程を。  
未筆ながら残暑お見舞いさせて頂きます。(心平太)

TEL・fax 077(532)4211  
携帯 080(2672)4446

川柳天守閣  
サンルシエル大津607号室

〒 520-0054  
滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

(事務所)

(発行責任者 真鍋心平太)  
(編集人 真鍋心平太)

二〇二四年八月二十五日発行  
ウェブ川柳天守閣会報